

## 『発心集』の泣不動説話

木下華子

はじめに

鴨長明の手に成る仏教説話集『発心集』は、流布本・異本ともに、いわゆる泣不動説話を収める。三井寺の僧・智興が重病に陥った際に、陰陽師安部晴明の勧めで弟子の証空阿闍梨が師の身代わりとなつて病苦を引き受けるが、証空の守り本尊であつた不動尊（絵像）が更に証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かるというものだ。

当該説話は、平安時代末期から鎌倉・室町時代にかけて様々な作品に登場しており、広く流布したものと考えられる。本稿では、一連の泣不動説話群において『発心集』の当該話がどのような位置にあるのか、さらに神宮文庫本に代表される異本系の本文がいかなる意図の下に作り出されたのかを考察したいと思う。

### 一 『発心集』収載の泣不動説話

『発心集』における泣不動説話は、流布本では慶安四年板本・寛文一〇年板本ともに巻六一、異本では神宮文庫本・山鹿積徳堂文庫本ともに巻三一一に配置される。両者の本文には、文脈に関わるような大きな差はないが、異本系の本文は、流布本には見えない和歌一首を持つ。この点を鑑み、本稿では神宮文庫本の本文をもとに、当該説話の位置を考えることとする。以下に全文を引用する（濁点・カギ括弧等を補うなど、任意に表記を改めた箇所がある。また、本文中の傍線・符号などは全て稿者による）。

証空阿闍梨、師匠ノ命ニ替ル事

A 中比、三井寺ニ<sup>a</sup>智空内供ト云フ尊<sup>キ</sup>人有ケリ。年<sup>タケテ</sup>闌如何ナル宿業ニテカ有ケン、世ノ心地ヲシテ限リナリケレバ、弟子共

集テ歎キ悲ム。其時、セイメイ清明ト云テ神ノ如クナル陰陽師有ケリ。是ノ病ヲ見テ云フ様、「此度コソ限り有ル定業ナレ。如何ニモ不レ可<sub>レ</sub>叶フ。但シ、其レニ取リテ志シ深カラン弟子ナドノ彼ノ命ニ替ランと思フ人ト有ラバ、祭り替奉リテン。其外ハ力ヲ不<sub>レ</sub>及ナン」云ヒケル。多ク弟子共サシツドエル程ニ、此事ヲ聞ク。智空内供、苦ミノタヘガタキマ、ニ、「若シ替ラント云フ者ヤ有ル」ト、双居タル弟子ドモノ氣色ヲ見レバ、詞ニコソ云イタレ、真ニハ捨<sub>テ</sub>難<sub>キ</sub>命ナレバ、皆々色ヲマサヲニナシテ、キモツブラシ目ニ成テ、一人トシテ「我レ替ラン」ト云フ人無し。

B 爰ニ証空阿闍梨ト云人、トシ若クテ弟子ノ中ニ有リ。弟子ニ取リテモ末ノ人也。誰モ思ヒ寄ヌ所ニ、進出テ内供ニ云フ様、「我レ替リ奉<sub>ン</sub>ト思フ。其謂ハ、法ヲ重クシテ命ヲ輕クスルハ、師ニ仕フル習也。争カ此事聞ナガラ身命ヲ惜マン。徒ニ捨ベキ身ヲ、今三世ノ諸佛ニ奉ツテ、人界ノ思ヒ出<sub>ニ</sub>モセン。但、八十ニナル母侍リ。我レヨリ外ニハ子無し。若シ、ユルサレヲ不<sub>レ</sub>蒙<sub>ラ</sub>、自身ヲ捨ルノミニ非ズ、二人ガ命尽スベシ。能々理リヲ申聞セテ暇ヲ請テ帰参ラン」ト云テ、座ヲタチヌ。内供ヨリ始テ諸ノ弟子ドモ、泪ヲ流シテ憐ム。

C 証空、母ノ許ニ至テ此事ヲ語ル。「願ハ歎キ給事無レ。縦ヒ

御跡ニ残リ居テ、後世ヲ訪ヒ奉<sub>ト</sub>モ、是程ニ大キナル功德ヲ作クラン事ハ有難シ。今ノ師ノ恩重シテ其命ニ替ラン事、三世ノ諸仏モ哀ミ給ヒナン。天衆地類モ驚キ給フベシ。其功德ヲ<sub>フクシテ</sub>統<sub>テ</sub>、母ノ後世菩提ニモシ奉ラン。是レ誠ノ孝養ナレバ、則アヤシキ身一ヲ捨テ、二人ノ恩ヲ報ジ奉ラン。況ヤ老少不定ノ世界也。若シ、徒ニ命尽テ、母ヨリ先事モヤ有<sub>ン</sub>。其時ハ、悔テモ何ノ甲斐カ有<sub>ン</sub>。何ヲカ此世ノ思出ニセン」ト泣々申ス。母此事ヲ聞テ、泪ヲ流シテ驚悲ム。「我レ、愚カナル心ニハ、功德ノ大キナル事モヲボエス。君ヨウチナリシ時ハ我ニ育クマレキ。我年闌テハ君ヲタノム事天ノ如シ。然ルヲ、残ノ命今日トモ明日トモ知ヌ時ニ至テ、我ヲ捨テ先立<sub>ン</sub>事コソ最悲シケレ。然レドモ、其志ノ深事ヲ思ニ、師ノ命ニ替リナバ君ガ後世ニ至リテモ疑ベカラス。若シ此事免<sub>ニ</sub>佛モ愚カ也ト見玉ヒ、君ガ心ニモ違ヌベシ。誠ニハ老少不定ノ世也。思ハバ夢幻シノ前后也。早ク君ガ心ニ任<sub>マ</sub>ス。トク浄土ニ生テ我ヲ助ヨ」トゾ、涙ヲ押ヘテ云ケル。

<sup>d</sup> 如何ニセン蓮ノ露トナルベクハ別レノ涙色深<sub>ク</sub>トモ

D 其時、証空泣々悦テ帰ヌ。則チ名乗ナド書付テ、清明ガ許ヘ進ツ。今夜命ニ替リ奉ルベキ由ヲ云ヘリ。カクテ夜漸ク深ケ行程ニ、此証空、頭痛ク心地悪ク、身ホトヲリテ堪難ク覺ウレバ、

我房ニ行テ見苦シカルベキ物ナド取調ツ、年来持<sup>チ</sup>奉リケル  
絵像ノ不動尊ニ向ヒ奉テ申ス様、「年若ク身盛ナレバ、命<sup>ヲ</sup>惜  
カラスニハアラザレドモ、師ノ恩ノ深事ヲ思ニ依リテ、今已ニ  
彼命ニ替リナントス。然ルニ、勤メ少ナケレバ、極メテ後世恐  
ロシ。願クハ、大聖明王哀ヲ垂レ給テ、惡道ニ落シ給フ<sup>ナ</sup>。重  
病已ニ身ヲ責テ、一時モ堪ヘ忍フベカラズ。本尊ヲ拝ミ奉ラン  
事、只今計也」ト泣々申ス。

E 其時、絵像ノ御目ヨリ血ノ涙ヲ流シ給ヒテ、「汝ハ師ニ替ル。  
我ハ又汝ニ替ベシ」ト宣ベ玉フ。御声、骨ニ通リ肝ニ染ム。ア  
ナイミジ、掌ヲ合テ念ジ居タル間ニ、汗流ヌル身サメテ、則サ  
ワヤカニ成ニケリ。

F 内供ハ其夜ヨリ心地ヨク成ケレバ、此事ヲ聞テナノメナラズ  
ニ覺テ、後チニハ餘人ニモ勝レテ、タノモシク思ハレタル弟子  
ニテ侍ル也。

G サテ、彼本尊ハ伝ワリテ、後ニハ白河ノ院ニヲハシケリ。常  
住院ノ泣不動ト申ハ是也。御目ヨリ涙ノコボレタル方ノアザヤ  
カニ見ヘ給ケルトゾキコウ。

H サテ、証空阿闍梨ト云ハ、空也上人ノ臂ノ折レ給ヒタリケル  
ヲ、餘慶僧正ノ祈リ直シ給タリケル時、法器ノ者ナリトテ、空  
也上人ノ奉ラレタリケル証空也。

当該話の梗概は以下の通りである。A 三井寺の僧・智興が重  
病になった際、安部晴明が「身代わりの僧を出して病を移し替  
える以外に、智興が助かる術はない」と診断する。B ただ一人、  
智興の弟子である証空阿闍梨が身代わりを申し出る。ただし、  
証空には八十になる母がおり、老母に道理を言い聞かせて暇乞  
いをしたいと言う。C 証空は老母に懇ろに別れを告げ、老母は  
泣く泣く納得して証空を送り返し、一首の和歌を詠んだ。D 婦  
参の後に、証空は晴明の祈祷によって師の病をその身に引き受  
ける。病苦の余りの耐え難さに、証空は長年、守り本尊として  
いた絵像の不動尊に向かい、一身に祈った。E その時、不動尊  
は血の涙を流し、自分が証空の身代わりになるという声が響き、  
証空・智興ともに助かる。F 智興は、これより後、証空を重用  
した。G その絵像は、後に白河院に伝わり、今は常住院の泣不  
動と呼ばれるもので、絵像の目から涙がこぼれた様子も鮮  
やかにうかがわれるということだ。H この証空は、空也上人の  
骨折した臂を余慶僧正が祈祷で治した際に、法器の者だとして  
空也が余慶に送った人物である。

## 二 流布本と異本の本文について

『発心集』において、流布本と異本の本文は、どちらかが古態性が強いことは難しく、異同の箇所によって性質が異なるのが実状である。今回、神宮文庫本すなわち異本系の本文で考察するにあたり、流布本との異同で目立つところを検討しておこう。なお、以下の四箇所において、異本系の一本である山鹿積徳堂文庫本は、神宮文庫本と同じ本文を持つことを付記しておく。

「1」 「智興」の名について、神宮文庫本は本行本文で「智空」と表記し、最初に「智空」が登場するAの冒頭では「空」の右に「興イ」と傍書する（傍線部a）。慶安四年板本は「智興」である。神宮文庫本ないしはその親本の段階で、『発心集』の他の書写本との校合が行われていたことを示す例だが、『発心集』に先行して泣不動説話を収める『宝物集』なども「智興」と表記するため、もとは「智興」だったものがどの段階かで誤写されたと考えられる。従って、この箇所は板本のほうが古態をとどめていよう。本稿でも、以下、「智興」で話を進める。

「2」 Aの最後、智興の弟子たちが師の身代わりとなることに怖じ気づく箇所（傍線部b）では、

・皆々色ヲマサヲニナシテ、キモツブラシ目ニ成テ（神宮文庫本）

・各色ヲツクリテフシ目ニ成ツ、（慶安四年板本）

となっている。皆が顔色を変えたという前半部は「顔色を真っ青にして」という意の本文を持つ神宮文庫本に対し、慶安四年板本は「化粧する」「顔作りをする」という「色ヲツクリ」となっており、意味が通じない。「怖じ気づいて色を変えたその顔を整えて」という意味に解釈できないこともないが、そうすると後半の「フシ目ニ成」つたとのつながりが希薄になる。また、「色を作る」という表現そのものは、江戸時代の浮世草子あたりから用いられる語であり（注1）、中世に遡る用例を見いだせない。「顔色を<sup>な</sup>変じる」という意の「色を作す」という表記が「色を作る」に変化した可能性もあるが、「色を作す」場合、通常は怒りの文脈で用いられるため、こちらも不審だ。後半部に目を移すと、神宮文庫本の本文は「肝をつぶしたような目」という意で解釈できるが、「ツブラシ目」という他に例を見ない表現となっており、神宮文庫本以前の段階での誤写が疑われる。板本は「伏し目になった」で意味は通りやすいが、整合性を付けた本文と考えることもできようか。この箇所は、神宮文庫本のほうに古態が見出せるように思われる。

〔3〕Cの、証空が老母に師の命に替わるといふ大きな功德を母の後世菩提に廻向したいと言ふ場面で、神宮文庫本は「其功德ヲ統テ」（傍線部c）、慶安四年板本は「其功德ヲカサネテ」である。「束ねる」「総合する」といふ意の「ふさぬ」は、古くは「朕総臨ミテ而御寓」（日本書紀・孝徳天皇白雉元年）などと用いられるが、平安時代以降の用例は少なく、管見では以下のようなものがある。

・東や香山の山に熟るなる花橘を八房ふさねて手に取ると夢に見つ  
（梁塵秘抄・四五三）

・さまざまに掌なる誓ひをば南無の言葉にふさねたるかな

（山家集・一五四一）

・伊豆国伊東・河津・宇佐美、この三ヶ所をふさねて、

（曾我物語・卷二）

・出羽の国十二郡を総ねて、両国六十六郡にて候。

（義経記・卷一）

・その上、天下の公物として立てられたるは和歌、筆道、有職、この三つの外なし。これをふさねて家になりたる人、貫之、又定家等なり。（雲玉集・序）

・……かしこきや 君の国内の まつりごと ふさねまをせる  
臣たちの……（八十浦乃玉・三一四・尾関正義）

対して、板本の「カサネテ」の場合、用例は数多あり、文意も取りやすい。どちらが先行するかということは定め難いが、『発心集』当該語を典故とする『三国伝記』巻九一六では、この箇所は「惣」と記される。神宮文庫本の「統テ」は、少なくとも中世の読みを反映した本文だと判断できよう。

〔4〕Cの末尾、神宮文庫本は「如何ニセン連ノ露トナルベクハ別レノ涙色深クトモ」（傍線部d）という和歌一首を載せる。板本はこの和歌を持たない。他の泣不動説話のうち、当該歌を持つのは、『不動利益縁起』（東京国立博物館本、鎌倉時代成立）のみである。そもそも存在した和歌、しかも数首の連続の中に置かれたわけではない一首のみの和歌が、転写の過程で脱落するとは考えにくい。先述の『三国伝記』巻九一六も当該和歌は持たないため、中世における『発心集』の伝本には、和歌がないタイプのものが確実に存在したと思われる。当該歌を持つ『不動利益縁起』は、室町期書写の神宮文庫本よりも成立が早いことを併せると、泣不動説話が様々な作品の中で流布していく過程において、和歌が増補された形が作られ、その和歌が神宮文庫本に流入したと考えるのが妥当ではないだろうか。

以上、「1」―「4」の異同を見たが、異本と流布本のどちらかが古態性が強いとは断言できない。先行研究と同じ見解に

留まるが、当該説話においても、異本・流布本はそれぞれに古態を残しているということを、改めて確認しておきたい。

### 三 泣不動説話の成立と展開

『発心集』以前、すでに泣不動説話は流布していたと考えられる。その成立と展開については鑿瀬一雄・南里みち子・中前正志らの各氏によってかなり明確な道筋が示されているが<sup>〔注2〕</sup>、それらを参看しつつ、『発心集』に至るまでの泣不動説話がいかなるものであったのかを見ておこう。

平安時代から室町時代にかけての同話・類話・引用をおおよその成立時期によつて並べると、次のようになる。

- ① 『今昔物語集』 卷一九―二四「保安元年（一一二〇）頃か」
- ② 『宝物集』（三卷本では卷中、七卷本では卷四）  
「治承三年（一一七九）以後数年間」
- ③ 『発心集』 卷三―一（神宮文庫本）、卷六―一（流布本）  
「建暦四年（一二二六）までに成立」
- ④ 『三井往生伝』「建保五年（一二二七）七月書写」
- ⑤ 『雑談抄』「弘安八年（一二八五）の書写奥書を持つ」
- ⑥ 『八幡愚童訓』「正安年間（一二九九―一三〇二）頃の成立か」

- ⑦ 『とはずがたり』 卷一・卷五「徳治元年（一二三〇六）頃成立」
- ⑧ 『不動利益縁起』「東京国立博物館蔵本、鎌倉時代製作とされる」

- ⑨ 『元亨釈書』 卷一二「元亨二年（一二三二）成立」
- ⑩ 『真言伝』「正中二年（一二三五）成立」
- ⑪ 『曾我物語』 卷七「南北朝時代頃の成立か」
- ⑫ 『園城寺伝記』 六「一三三〇―四〇年代の成立か」
- ⑬ 『寺門伝記補録』 第一五  
「応永年間（一三九四―一四二八）成立」
- ⑭ 『三国伝記』 卷九  
「応永十四年（一四〇七）―文安三年（一四四六）成立」
- ⑮ 謡曲『泣不動』
- ⑯ 『塵添壺囊鈔』「天文元年（一五三二）成立」  
先行研究が示す通り、実に「知名度の高い説話」であることがわかるが<sup>〔注3〕</sup>、本稿では特に『発心集』に先行して成立する①『今昔物語集』②『宝物集』と、書写時期は『発心集』に少し遅れるが説話自体は先行していたであろう④『三井往生伝』を中心に整理を行うこととする。それぞれの話の流れと相違点は、次頁の表のようになる（A―Hは、第二節において、『発心集』の内容を整理した際の符号に一致）。

H	G	F	E	D	C	B	A	
		用。師僧は弟子の僧をかわいがり、重	（編者の評） これは、身代わりとなった弟子の僧の心を、泰山府君が哀れんだからだろう。	（師僧の評） 師僧は弟子の僧をかわいがり、重	（師僧の評） 師僧は弟子の僧をかわいがり、重	（師僧の評） 師僧は弟子の僧をかわいがり、重	（師僧の評） 師僧は弟子の僧をかわいがり、重	①『今昔物語集』
			証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「臨終正念にて殺し給へ」と額を地につけて礼拝すると、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「臨終正念にて殺し給へ」と額を地につけて礼拝すると、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「臨終正念にて殺し給へ」と額を地につけて礼拝すると、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「臨終正念にて殺し給へ」と額を地につけて礼拝すると、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「臨終正念にて殺し給へ」と額を地につけて礼拝すると、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	②『宝物集』
証空は、空也が余慶に送った人物である。	絵像の不動尊は、後に、白河院・常住院と伝来。	智興は証空をかわいがり、重用。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「勤めが少なく、後世が恐ろしい。自分を哀れんで悪道に落とさないうでほしい」と泣く泣く訴えたと、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「勤めが少なく、後世が恐ろしい。自分を哀れんで悪道に落とさないうでほしい」と泣く泣く訴えたと、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「勤めが少なく、後世が恐ろしい。自分を哀れんで悪道に落とさないうでほしい」と泣く泣く訴えたと、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「勤めが少なく、後世が恐ろしい。自分を哀れんで悪道に落とさないうでほしい」と泣く泣く訴えたと、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	証空が、守り本尊である絵像の不動尊に対し、「勤めが少なく、後世が恐ろしい。自分を哀れんで悪道に落とさないうでほしい」と泣く泣く訴えたと、不動尊が血の涙を流して証空の身代わりとなり、証空・智興ともに助かる。	③『発心集』
			証空が、本尊である絵像の不動明王に対し、「南無婦命頂礼大聖明王臨終正念極楽往生」と高声にて三返唱えらる。絵像の不動明王が病の様を呈して涙を連綿と流し、証空は快復。	証空が、本尊である絵像の不動明王に対し、「南無婦命頂礼大聖明王臨終正念極楽往生」と高声にて三返唱えらる。絵像の不動明王が病の様を呈して涙を連綿と流し、証空は快復。	証空が、本尊である絵像の不動明王に対し、「南無婦命頂礼大聖明王臨終正念極楽往生」と高声にて三返唱えらる。絵像の不動明王が病の様を呈して涙を連綿と流し、証空は快復。	証空が、本尊である絵像の不動明王に対し、「南無婦命頂礼大聖明王臨終正念極楽往生」と高声にて三返唱えらる。絵像の不動明王が病の様を呈して涙を連綿と流し、証空は快復。	証空が、本尊である絵像の不動明王に対し、「南無婦命頂礼大聖明王臨終正念極楽往生」と高声にて三返唱えらる。絵像の不動明王が病の様を呈して涙を連綿と流し、証空は快復。	④『三井往生伝』



表を見ると、①と②③④には大きな違いがある。それは、(1)「三井寺」「智興」「証空」という説話の場と登場人物の個人名の有無、(2)不動尊の靈驗譚であるかどうか、(3)証空の老母の存在の有無、である。

まず(1)であるが、②③は、棒線部のように「三井寺」「智興」「証空」という説話の場と登場人物の個人名を明記する。④は三井寺内部で作られた寺門の往生伝であるから、具体的な語がなくとも、場が三井寺であることは明らかだ。①『今昔物語集』は、「今昔、 ト云フ人有ケリ。 ノ僧也」として、他作品が「三井寺」「智興」とする箇所を欠字にする。「安部晴明」の名はあるのだが、「証空」についても「年来其ノ事トモ無クシテ相副ル弟子」として個人名は記さない。『今昔物語集』がわざわざ欠字にしたということは、編者が後に調べて補記しようと考えていたことを示す。ならば、「三井寺」「智興」「証空」の説話として存在していたものが、①の段階で固有名が落ちたとは考えにくい。先行研究が指摘するよう<sup>(注4)</sup>、後に「泣不動説話」となる話の源流は、『今昔物語集』に見えるような固有の場や人物を伴わない安部晴明の呪術説話であった可能性が高いだろう。

(2)についても(1)と同様、①と②以下では奇跡の位置

づけが大きく異なる。①は、「此ヲ思フニ、僧ノ師ニ代ラムト為ルヲ、冥道モ哀ビ給テ、共ニ命ヲ存シタル也ケリ」として、弟子の僧が助かったのは冥界の神である「冥道」(泰山府君)の哀れみによる奇跡だとするのに対し、②③④では波線部のように不動尊の靈驗譚となる。天台宗寺門派の祖・智証大師円珍は、不動明王信仰に篤く、その教学や思想において不動明王信仰が重要な位置を占めていたことが知られ<sup>(注5)</sup>、円珍が承和五年(八三八)に感得したとされる不動明王像(いわゆる黄不動像)は秘仏として三井寺に現存する。三井寺は、日本における不動信仰の一大拠点であり続けた。そのような宗教的背景を持つ三井寺の内部か近辺に①のような説話に取り込まれて成長する際に、不動尊の靈驗譚として位置づけ直されたのだろう<sup>(注6)</sup>。これと軌を一にして、説話は三井寺の僧である智興や証空という固有の存在を伴った形になり、それが喧伝とともに外部へと広まったと考えられる。

(3)の証空の老母についても、(1)(2)同様、①には無く、②以下に存在する要素である。これも、三井寺における不動尊の靈驗譚として説話が位置づけられる過程で、新たに付け加わったのだろう。この老母については、②③④の中で、性格に違いが見られる。②③では老母は証空が命を落とすことを悲



しむのだが、④では母は証空の決断を悦ぶ存在になっているのだ。

まず、「悲しむ母」であるが、②『宝物集』は、「母、此事ヲ聞テ、全クルス事無トイヘドモ」（三卷本・七卷本<sup>（注7）</sup>）となっており、母は証空の決意を許さない。これは、子に先立たれる悲しみ故に証空を制していると推測されよう<sup>（注8）</sup>。③『発心集』の母は、「此事ヲ聞テ、泪ヲ流シテ驚悲」しんだ後に、納得することになる。⑤以下では、このような「悲しむ母」が登場するものに、

⑧母これを聞きあえず、夢の心地して地に臥□、涙を流してぞ叫びける。（不動利益縁起）

⑪母聞もはてず、証空の袖に取つき、「思ひもよらず、師匠の御恩ばかりにて、母があわれみをばすてたまふべきか。御身をのこし、みづからさきだちてこそ、順次なるべけれ、思ひもよらぬ例」とて、証空の膝にたふれかゝり、涙にむせぶばかりなり。（曾我物語）

⑭母此ノ事ヲ聞テ涙流テ驚悲云ケルハ、（三国伝記）がある。

続いて「悦ぶ母」だが、④『三井往生伝』が、「母聞不<sup>レ</sup>愁、還有「勸意」とするのをはじめとして、

⑤母云、「不<sup>レ</sup>及<sup>二</sup>左右<sup>一</sup>。早可<sup>レ</sup>奉替」云々。（雑談抄）  
⑨母曰、「我老命在旦暮」、唯憑<sup>二</sup>汝<sup>一</sup>。汝其先<sup>二</sup>我乎<sup>一</sup>。然思、汝生替<sup>レ</sup>師。雖<sup>レ</sup>死不<sup>レ</sup>遺<sup>二</sup>妾於地下<sup>一</sup>矣。如<sup>二</sup>汝勇勤<sup>一</sup>。我欽<sup>二</sup>歆<sup>一</sup>之。」（元亨釈書）

⑫母聞不<sup>レ</sup>愁、還作<sup>二</sup>随喜<sup>一</sup>。（園城寺伝記）

となっている。このように、②③と④に見える母の人物造型の違いは、後続の作品群にも受け継がれていることがわかる<sup>（注9）</sup>。この点に関しては、「不動の涙」の形態移行をつぶさに分析した中前正志の「不動の涙——泣不動説話微考——」が参考になる<sup>（注10）</sup>。中前は、不動尊の流す涙の性質に注目し、泣不動説話における不動の涙が、証空の病苦を身代わりとして引き受けた「病悩苦痛の涙」と、証空の志に動かされた「感動哀憐の涙」という二系統に分類されることを見出した。「病悩苦痛の涙」の形を取る明らかな作品は、「如<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>病氣<sup>一</sup>自<sup>二</sup>眼出<sup>一</sup>涙連々不<sup>レ</sup>止」とする『三井往生伝』をはじめとして『元亨釈書』『園城寺伝記』『寺門伝記補録』であり、確定はできないが解釈上の可能性のあるものとして『雑談抄』『真言伝』と謡曲『泣不動』がある。対して、『宝物集』『発心集』『泣不動縁起絵巻』『三国伝記』には、不動尊が病を引き受けたとする表現は存在せず、その涙は証空の志に対する「感動哀憐の涙」であった<sup>（注11）</sup>。

本来、不動尊の靈驗譚としての身代わり説話であれば、身代わり・代受苦の証がその像に何らかの形で残されるというのが伝統的な定型であり、前者はまさしくその定型に則っている。しかし、後者のように、不動尊の涙が感動哀憐によるものであるば、身代わり説話としての定型は欠落し、話の重心は証空の殊勝な志や母との別離に傾くことになる。泣不動説話の重心を、前者のような純粹な不動の靈驗譚（身代わり説話）に置くことを望むのは、三井寺の内部・近辺であらうし、実際、前者を収める作品群は、後者に比べて圧倒的に三井寺関係のものが多く、泣不動説話の発祥・伝承の場が、不動信仰の一大メッカである三井寺であることを鑑みると、不動の涙の形は、そもそも「病脳苦痛の涙」として三井寺の内部・近辺で出発し、後に寺外において「感動哀憐の涙」へと展開したと考えられる。これが、当該論文の結論である。

話を老母の人物造型に戻そう。「悦ぶ母」の形を取る作品群を見渡すと、中前の指摘する「病脳苦痛の涙」を流す不動尊を描く作品群とはほぼ重なることに気付く。作品が成立した場については、④『三井往生伝』⑫『園城寺伝記』はもとより、⑤『雑談抄』も三井寺関係の雑録である。つまり、「悦ぶ母」の造型もまた、三井寺内部・近辺で行われた可能性が高いということ

だ。師の命に替わるという行為は仏法を重んじ、大きな功德を作る善行である。子を失う悲しみの余りに泣いて善行を止めるのではなく、悦んで背中を押す母こそが、本来望まれるものだったのではないか。対して、子が先立つことを嘆き「悲しむ母」は、一世一代の善行を遂げようとする証空の絆しとなってしまう。仏教上望ましいものではないが、子を思う一般的な母の姿でもある。そのような「悲しむ母」の造型が育つのは、不動尊が「感動哀憐の涙」を流し始める三井寺の外が相応しい。母が悲しめば悲しむほど、証空の志は殊勝なものになり、それに打たれた不動尊の涙は「感動哀憐」のものになるからだ。すなわち、母の造型も、三井寺内部・近辺における「悦ぶ母」から、寺外における「悲しむ母」へと移行していったものと考えられよう。

以上、(1)～(3)で検討したことをまとめると、泣不動説話とは、『今昔物語集』に見えるような安部晴明の呪術説話を素材として、それが三井寺内部・近辺において不動尊の靈驗譚へと成長し、智興・証空という固有の存在に託されて成立したものと考えられる。その説話が寺外に流布する過程において、「不動尊が証空の病脳を引き受けて苦しみの涙を流す」という身代わり説話の定型が崩れ、「不動尊が証空の殊勝な志に感動

して哀憐の涙を流す」形へ展開した。これと同様に、寺内・近辺では、証空の決意を悦び背中を押す存在であった母が、子に先立たれることを嘆き悲しむ母へと移行したと思われる。

ここから、『発心集』所載の泣不動説話の位置を考えると、

(1)「三井寺」「智興」「証空」という固有の場と人物の話である。

(2) 不動尊の靈驗譚である。

(3) 証空の老母が「悲しむ母」として登場し、不動尊は「感動哀憐の涙」を流す。

という特徴を備えた当該説話は、三井寺の外で展開した形——現存する先行作品の中では『宝物集』型——を享受したものと判断することができる。

#### 四 『発心集』の特徴 (一)

『発心集』の泣不動説話は三井寺外で広まった話型を受け継いでおり、先行する作品としては、すでに『宝物集』が存在する。ただし、両者の泣不動説話には同文性はほとんど見られず、『発心集』当該話の直接の出典が『宝物集』だったとは言い難い。しかし、『発心集』における『宝物集』との共通話は、流布本系では全一〇二話中一一話、異本系では全六二話中七話と

なっており、およそ一割の説話が重なることになる。『宝物集』を直接の出典と考える話もあることが指摘されており<sup>(注12)</sup>、鴨長明が『発心集』を編む際の素材とした先行書の中に『宝物集』があったことは疑いもないだろう。そのような状況を鑑みれば、泣不動説話の話型そのものについては、『発心集』が大きく手を加えたとは言い難い。

前節の表を確認すると、先行の諸書に比して『発心集』のみが持つ要素は、G 絵像の不動尊の伝来のルート(証空↓白河院↓常住院)、H 証空の出自(空也が余慶に送った)というものである。

G に見える、「奇瑞を証明する絵像の不動尊が、三井寺の長吏を輩出する三門跡の一つ「常住院」に伝来し現存する」という伝来の情報は、当該説話の真実味を増すと同時に、三井寺においてこの伝承と絵像の不動尊がいかに重要視されたかを跡付ける役割も果たしている。さらに、そのルートの途中に入る「白河院」(白河に設けられた藤原摂関家の別業で後に白河天皇の御所)の存在は、摂関家や白河天皇という貴顕によって説話内容が保証されたことを意味しよう。後の⑬『寺門伝記補録』において証空は常住院の始祖とされるが、Gは、常住院そのものが泣不動説話を自らの権威付けに用いる過程で生成された可能

性もあろうか。

Hは、証空の出自を明らかにするものだが、それは証空の存在を保証すると同時に、空也・余慶という高名な僧と証空が関わることで、証空の価値を高める役割を果たしているとも考えられる。また、この箇所は、『宇治拾遺物語』下——四二に収められる空也の臂折れ説話との関連がうかがわれる。空也の折れ曲がつた左肘を、余慶（三井寺長吏・延暦寺座主）が加持祈祷で治し、その札に空也が連れていた三人の聖のうちの一人を送ったというものだが、『宇治拾遺物語』では送られた聖の名は「義観」だ。『打聞集』二六「公野聖事」も同内容の説話だが、聖の名は「起経」となる。小島裕子が指摘するように（注13）、問題は聖の名前が取り違えられたことではなく、空也の臂折れ説話によって、安部晴明・余慶・証空が「靈験あらたかな験者」という要素で繋がることにある。晴明については言わずもがなだが、余慶もまた、前述のような著名な験者である。後の作品であるが、⑤『雑談抄』において、証空は加持祈祷によって慶勝証人を蘇生させた「靈験殊勝」な人物であり、彼もまた高力の験者として説話世界に存在した。三井寺は加持祈祷の修法によって多くの貴顕の信頼・尊崇を得、修験道とも関係が深い。そのような宗教的世界への意識が、Hの背後に読み取れるもの

と思われる。

つまり、GHは、『発心集』以前の段階で流布していた説を『発心集』が取り込んだ可能性も高い。加えて、両者ともに説話内容に直接関わるものではなく、その真实性を保証し、権威付けを行う類いの情報だと考えられるのである。

## 五 『発心集』の特徴（二）——母の変貌——

ならば、泣不動説話そのものにおける『発心集』の特徴はどこに見出せるだろうか。ここで、Cにおける証空と老母の別離の場面を『宝物集』と比較してみよう。『宝物集』では、

・母、此事ヲ聞テ、全クユルス事無トイヘドモ、生死無常ノ有様ヲコシラヘイヒテ、イソギ帰来テ、已ニ師ニカハル。

（三卷本）

・母、此事を聞きて、またくゆるす事なしといへども、生死の有様をいひて、泣く泣くかへり来たりて、すでに師に替はる。

（七卷本）

となっており、証空が母を説得する場面は実に簡潔であり、母が証空の言葉に納得したかどうか不明ではない。さらに、三卷本では「イソギ帰来テ」と証空が帰路を急ぐ様が記され、

その心が母よりも師・智興に傾いていることが読み取れる。七巻本では、そのような急ぐ様子は消えており、証空は泣く泣く母の許から帰ることになるが、この涙は、母の理解を得られた安堵の涙とは解しがたい。母に先立つ不孝の悲しみ故の涙と捉えておくのがよいだろう<sup>(注1)</sup>。

対して、『発心集』はどうだろう。証空が母を説得する言葉は、願ハ歎キ給事無レ。縦ヒ御跡ニ残リ居テ、後世ヲ訪ヒ奉トモ、是程ニ大キナル功德ヲ作クラン事ハ有難シ。今ノ師ノ恩重シテ其命ニ替ラン事、三世ノ諸仏モ哀ミ給ヒナン。天衆地類モ驚キ給フベシ。其功德ヲ統<sup>フサキ</sup>テ、母ノ後世菩提ニモシ奉ラン。是レ誠ノ孝養ナレバ、則アヤシキ身一ヲ捨テ、二人ノ恩ヲ報ジ奉ラン。況ヤ老少不定ノ世界也。若シ、徒ニ命尽テ、母ヨリ先事モヤ有ン。其時ハ悔テモ何ノ甲斐力有ン。何ヲカ此世ノ思出ニセシ。

であり、『宝物集』に比べるとその長さ・詳しさは圧倒的である。話の内容も、「自分が師の命に替わるならば、三世の諸仏も自らを哀れむだろうし、大きな功德を作ることになる。それで母の後世を救うことができるのだから、これこそが真実の孝養だ。師の命に替わるならば、自分一人の命で師と母と二人に恩を報じることができるが、自分が何の功德も作らずに母に先

立ってしまったら、母の後世を救うことはかなわなくなる」というものであり、自らの行為が母を浄土に導くことになると訴え、母を安心させようとしていることがうかがえよう。また、証空の台詞には、「二人ノ恩ヲ報ジ奉ラン」というものがあるが、この時、母と師・智興は等価であるように受け止められようか。つまり、『発心集』においては、母の存在が実に大きいものになっているのである。

続いて、母の言葉に目を向けてみよう。『宝物集』は母が納得したかどうかには全く触れないが、『発心集』は証空の語りにかけて答える母の台詞を用意している。

母此事ヲ聞テ、泪ヲ流シテ驚悲ム。「我レ、愚カナル心ニハ、功德ノ大キナル事モヲボエス。君ヨウチナリシ時ハ我ニ育<sup>ハゴ</sup>クマレキ。我年闌テハ君ヲタノム事天ノ如シ。然ルヲ、残ノ命今日トモ明日トモ知ヌ時ニ至テ、我ヲ捨テ先立シ事コソ最悲シケレ。然レドモ、其志ノ深事ヲ思ニ、師ノ命ニ替リナバ君ガ後世ニ至リテモ疑ベカラス。若シ此事免<sup>ユルハ</sup>佛モ愚カ也ト見玉ヒ、君ガ心ニモ違ヌベシ。誠ニハ老少不定ノ世也。思ヘバ夢幻シノ前后也。早ク君ガ心ニ任<sup>マカ</sup>ス。トク浄土ニ生テ我ヲ助ヨ」トゾ、涙ヲ押ヘテ云ケル。

涙を流す母は、余命幾ばくもない老齢の自分を捨てて我が子に

先立たれる悲しみを語るが、同時に、証空の志の深さ・師の命に替わる功德によつて証空が浄土に往生することを理解している。そして、「お前の思うようにせよ」と証空の背中を押し、自らの後世を救うように頼むのである。だからこそ、続くDの冒頭、寺への帰途につく証空は、「泣々悦テ帰ヌ」と記されるのだ。証空の涙は、母と想いを共有することができた悦びと安堵の涙であろう。

この、母が証空の説得に応じて納得するプロセスの存在こそが、『発心集』の最大の特徴である。『発心集』は、先行する泣不動説話に比べ、母の存在と母子の情愛を最も強めた形になっていると言えよう。証空の行為の仏教的意義を理解し、「早く君ガ心ニ任ス」と背中を押す母の姿は、第三節の(3)で見た三井寺内部・近辺で発生した「悦ぶ母」の造型を受け継いでいるのかもしれない。しかし、『発心集』の特徴は、享受の先に生成された、母の心情の推移——我が子に先立たれる哀しみに逡巡しながらも、互いの極楽往生を願つて自らを納得させ、証空を送り出す——を具に書き出した点に見出すべきだろう。

さらに、第三節で述べたように、『発心集』の不動尊は、証空の志に感じて「感動哀憐の涙」を流す。『発心集』が母の存在と母子の情愛に一つの焦点を結ぼうとしているのであれば、

不動尊による奇跡の原動力には、証空の師への思い・仏道への志のみならず、母子が互いを思いやる情愛の深さが据えられているのではないだろうか。

説話の配列を確認してみよう。当該話は、神宮文庫本では卷三——に位置するが、続く卷三——「或女房、天王寺ニ参テ、入海事」は、娘を失った母が難波の海に入水し、極楽往生する話であり、この二話は母の子への愛情という点で連続する。慶安四年板本では卷六——になるが、その前後は、

卷五——一四「勤操、憐榮好事」

〔母〕に自分の食事を分けて送っていた榮好が死に、隣の房の勤操は榮好の死を隠して自分の食事を送るが、ある日、その食事が遅れてしまい、榮好の死に気付いた母は頓死。その供養の法事が、後の法華八講の起源となった。

——一五「正算僧都母、為子志深事」

正算僧都の母は、貧しさの中、自らの髪を売って修行する我が子に食事を送っていた。

卷六——一「証空、替師命事」

——二「后宮半者、悲一乗寺僧正入滅事」

ある女房が捨て子だった自分を養ってくれた増養



僧正の死を悲しむ。

### —三— 「堀川院藏人所衆、奉慕主上入海事」

堀河院を心から慕っていた藏人が、院が龍に生まれ変わって西海にいと夢に見て、東風が強く吹く日に海に出て行方知れずになる。

### —四— 「母子三人賢者、通衆罪事」

兄の妻の間男を弟が殺害。その母と兄（継子）・弟（実子）の三人が互いをかばい、兄弟は赦免。となっており、母の子に対する慈愛、子の親（と思う恩人）への思い、と親子の関係で話が連続している。神宮文庫本も流布本も、当該話については母子の情愛を核と見て説話の配列を行っていると考えてよい。

『発心集』の泣不動説話は、「不動尊の靈驗譚という枠組みを維持しつつも、証空の母の存在を強め、不動尊の奇跡の原動力に母子の情愛を据えるという形で再生されたもの」との位置付けを行っておきたい。その再生が長明個人の所産であるかどうかは断じたいが、少なくとも、長明が目にしたであろう『宝物集』においては、母の存在は決して大きいものではなかった。如上の特徴が異本・流布本の両本文に共通する以上、この再生ないしは再生された泣不動説話の採録は、編者である長明の意

識的な選択だったと考えられよう。

### 六 神宮文庫本の和歌について

最後に、神宮文庫本が有する和歌一首、「如何ニセン蓮ノ露トナルベクハ別レノ涙色深クトモ」について、多少の考察を試みておきたい。第二節で述べたように、当該歌は、⑧『不動利益縁起』にも見える。

和歌の位置は、Cの末尾であり、母の証空への言葉が「……トク浄土ニ生テ我ヲ助ヨ」トゾ、涙ヲ押ヘテ云ケル。」と記された後に、一首が置かれ、「其時、証空泣々悦テ帰ヌ」と後に続く。大意は、「どうしたものだろうか、いや、どうしようもないだろう。いずれは蓮の花の露となって極楽浄土に往生することができるのだから、今、あなたとの別れに流す涙の色が紅に染まったとしても」となる。

神宮文庫本では和歌の詠み手が母なのか証空なのかは明示されない。『不動利益縁起』は和歌の前に、「……さりながら因果をわきまへ心□母なれば、涙をおさへてかくなん」という一文が置かれており、母が詠んだ和歌になっている。内容を見ると、初句の「如何ニセン」は、「どうしよう」という疑問よ



りも、「涙が紅に染まっても」どうすることもできない」というあきらめを含んだ反語と解釈すべきだろうから、息子に先立たれる悲しみを抑えかねつつも極楽往生の縁だと自らを納得させる母の心情を詠んだものとするのが自然だろう。詠み手は証空の母と考えておく。

一首中に示される「色深」い「涙」とは、悲嘆の涙としての紅涙（血の涙）を意味する。和歌においては古くから詠まれる常套的な表現であるが、いくつか用例を挙げてみよう。

・紅に涙の色は深けれどあさしまで人のつれなき

（久安百首・六五・崇徳院）

・色深き涙の川のみなかみは人を忘れぬ心なりけり

（山家集・一二八三）

為家元服したる春加階申すとして、兵庫頭家長につけ侍りし

・子を思ふ深き涙の色にいでてあけの衣のひとしほもがな

（拾遺愚草・二七・二三）

「色深」い「涙」が、崇徳院・西行詠のように恋の嘆きによる場合もあれば、定家詠のように切なる親心という場合もある。当該歌もまた、血の涙を流すほどに深く切実な母の思いを表している。

一首中の表現は、あくまでも「別レノ涙色深ク」である。し

かし、この歌から喚起される「紅涙」「血の涙」のイメージは、説話のクライマックスである不動尊の奇跡——「絵像ノ御目ヨリ血ノ涙ヲ流シ」た不動尊が証空の身代わりになる場面——に通じるものであろう。この和歌は、事態を先取り、予言する役割を持つ「予言歌」として捉えることも可能なのである。そして、この和歌の詠み手が証空の母であるということは、母が後の奇跡を予言する役割を担わされていることを意味する。つまり、神宮文庫本の本文とは、母の和歌を挿入することにより、「証空の母の存在を強め、不動尊の奇跡の原動力に母子の情愛を据える」という、そもそもの『発心集』の意図をより強めた形になっている。そのように理解することができよう。

## 終わりに

以上、『発心集』の泣不動説話を、先行作品との関係および伝本間の異同から読み解いてきた。『発心集』において、証空の母の存在感が増し、母子の情愛が説話の核となった理由の一端を探るならば、同時代に一世を風靡した澄憲と彼にはじまる安居院流の唱導が母の恩愛を重視する説法を行っていたという、宗教的潮流との関係も視野に入つてこようか。亡母追善供

養などの唱導の場において、高僧と母との恩愛物語が多く語られ、母が僧の守護神的役割に据えられていったという唱導の流れ<sup>(注15)</sup>と、泣不動説話において母の存在が説話の核へと成長するという変化は、軌を一にする可能性があろう。紙幅も尽きるため、これ以上立ち入ることはできないが、『発心集』泣不動説話が成立する背景については、このような見通しを立てて、筆を擱くこととする。

注1 『日本国語大辞典』(第二版)は、初出の用例に、井原西鶴『好色一代男』(二六八二刊) 三—三「色つくりたる女、肌には紅うこんの絹物」を挙げる。

2 梁瀬一雄『泣不動』の説話」(『説話文学研究』、三弥井書店、昭和四九年)、南里みち子「泣不動説話の成立と展開」(『今井源衛教授退官記念文学論叢』、昭和五七年)、中前正志「不動の涙——泣不動説話微考——」(『国語国文』六五—四号、平成八年四月)。

3 三木紀人校注『方丈記 発心集』(新潮日本古典集成、昭和五一年)。

4 梁瀬・南里前掲論文(注2)。

5 中野玄三『不動明王像』(『日本の美術』二三八、至文堂、

昭和六一年)、小島裕子「証空の泣き不動伝承の諸相と三井寺の伝承世界」(『仏教説話の世界』、かたりべ叢書三四、平成四年)、中前前掲論文(注2)。

6 小島前掲論文(注5)、中前前掲論文(注2)。

7 『宝物集』の伝本は、一卷本・二巻本・平仮名古活字三巻本・平仮名製版三巻本・片仮名古活字三巻本・第一種七巻本・第二種七巻本と実に多様であるが、小泉弘・山田昭全の先行研究に従って整理すると、一卷本・片仮名古活字三巻本・第二種七巻本の三種を基本とする。一卷本は草稿本、これに大幅な増補と改訂が施されたのが片仮名古活字三巻本であり、そこからさらに増訂されたのが第二種七巻本である。ここまですべてが著者・平康頼の所産であって、康頼は第二種七巻本をもって『宝物集』の完成本としたとする説が有力。この他の伝本については、二巻本・平仮名古活字三巻本は第二種七巻本の省略本、第一種七巻本は片仮名古活字三巻本・平仮名古活字三巻本・第二種七巻本の三本を江戸時代に至って混合させた本である。本稿では、主として、『発心集』以前に成立を見た片仮名古活字三巻本と第二種七巻本の本文を考察の対象とし、特に断らない限り、片仮名古活字三巻本を「三巻本」、第二種七巻本を「七巻本」

と呼称する。

- 8 平坂名古活字三巻本の当該箇所は、「母のありけるが、是を聞きて、「八十に余りたる母を振り捨てて先立たん事はいかに」と制しければ」となっている。二巻本も多少の異同はあるがほぼ同文。こちらは、子に先立たれる悲しみ故の制止というはつきりとした表現になっている。

- 9 ⑥『八幡愚童訓』⑦『とはずがたり』（以上は泣不動説話の一部引用）、⑩『真言伝』、⑬『寺門伝記補録』、⑮謡曲『泣不動』、⑯『塵添壺囊鈔』には、証空の老母は登場しない。

- 10 中前前掲論文（注2）。

- 11 中前は、「感動哀憐の涙」のパターンに、不動尊が証空に「身代わりに病を受けよう」と告げる前に涙を流すという特徴を見出す。

- 12 流布本巻二——「或上人、不值客人事」・神宮文庫本巻一——四「或上人、客人ニ不会事」は、『宝物集』と『往生拾因』をあわせ参看して構成したものとする説がある（新潮日本古典集成『方丈記 発心集』頭注）。

- 13 小島前掲論文（注5）。

- 14 平坂名古活字三巻本『宝物集』では、当該箇所は、以下

のようになる（二巻本・第一種七巻本もほぼ同文）。母のありけるが、是を聞きて、「八十に余りたる母を振り捨てて先立たん事はいかに」と制しければ、証空が云く、「流転三界中、恩愛不能断、菩薩愿入無為、真実報恩者と云要文を引きけり。此の心は、「三界のうちに流転すれば、恩愛絶ゆる事なし。恩を捨てて無為に入る者は、真実の恩を報ずる者なり」と仏の説き給へるなり。されば、親の恩は、三界を離れざる恩愛なり。師匠の恩は三界を離れて無為に入る、真実の恩なり。我すでに師匠の命に替はりなん。此の功力によりて、母も必ず無為の都に入り給ふべし。心やすく思ひ給へ」といひて、たちまちに師匠の命に替はりぬ。証空は「流転三界中……」と、出家時に多く誦される著名な偈文を用いて自らの行為を仏教的に意義付け、その功德によつて母もまた救われると説く。しかし、その言葉は、「親の恩は、三界（衆生が生死輪廻する欲・色・無色の三種の世界）を離れ得ない恩愛」「師の恩は悟りの境地に至らしめる真実の恩」というもので、母の恩は真実の悟りを妨げる煩惱の一つという位置づけだ。母の納得の有無については語られず、証空の帰路の様も、「たちまちに」（平坂名古活字三巻本・二巻本）、「云捨て、急ぎ帰り来りて」（第一

種七卷本）であって、その心が母ではなく師・智興にあると読み取れよう。

- 15 田中徳定「中世唱導資料にみる高僧と母の物語をめぐって」〔駒沢国文〕四八号、平成二三年二月、「中世唱導資料に見る母性」〔国語と国文学〕八八―七号、平成二三年七月。

\*本文の引用は以下の通り。読解の便を図るため、漢字を当て送り仮名を補うなど表記を改めた箇所がある。和歌については、特にことわらない限り、『新編国歌大観』に拠る。

- ・神宮文庫本・慶安四年板本『発心集』―大曾根章介・久保田淳編『鴨長明全集』（貴重本刊行会、平成一二年）
- ・平仮名古活字三卷本『宝物集』―『宝物集 三卷本』（古典文庫、昭和二八年）
- ・片仮名古活字三卷本『宝物集』―山田昭全・大場明・森晴彦編『宝物集』（おうふう、平成七年）
- ・第一種七卷本『宝物集』―大日本仏教全書『撰集抄 発心集 宝物集』（仏書刊行会、昭和五八年）
- ・第二種七卷本『宝物集』―新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』（岩波書店、平成五年）

・『三井往生伝』―続天台宗全書・史伝2『日本天台僧伝類1』（天台宗典編纂所、昭和六三年）

・『元亨釈書』―新訂増補国史大系『日本高僧伝要文抄 元亨釈書』（吉川弘文館、昭和四〇年）

・『雑談抄』―築瀬一雄編著・碧沖洞叢書七（臨川書店、平成七年）

・『園城寺伝記』―大日本仏教全書『園城寺伝記 寺門伝記補録』（仏書刊行会、昭和五六年）

・『三国伝記』―中世の文学『三国伝記』（三弥井書店、昭和五七年）

・『曾我物語』―日本古典文学大系『曾我物語』（岩波書店、昭和四一年）

\*本稿は、平成二五・二六年度の中世文学演習Ⅰ・Ⅱの授業において、学生とともに神宮文庫本『発心集』を輪読した成果である。ともに学び考えてくれた本学日本語日本文学科の学生たちに心から感謝したい。

（きのした はなこ／本学准教授）